

中国の農村地域における 就学前随班就読の実情と課題について

— 吉林省図門市を中心に —

趙 京 玉

(2009年10月6日受理)

The Actual Situations and Problems of Early Childhood Regular Classroom
Integration of Rural Area in China
— The middle to Tumen-city, Kitsurin-province —

Jingyu Zhao

Abstract: This study is to clarify the actual situations and problems of early childhood regular classroom integration of rural area in the Tumen-city, Kitsurin-province, China, as the results of analyzing the awareness of teachers in kindergartens. Through this research, there are two issues understood at present. First, most have not been conducted early childhood regular classroom integration at kindergarten in rural areas. The second is the practical issue concerning the contents of early childhood regular classroom integration in private kindergarten. This study points out the need to educate expertise in special education for teachers working at kindergartens, which to fill the gap between knowledge and practice, and to resolve the instability in the positive senses.

Key words: China, rural area, early childhood, regular classroom integration

キーワード：中国，農村地域，就学前，随班就読

はじめに

1980年代から実施された改革開放は中国の人々の生活に著しい変化をもたらしてきた。経済的に豊かになるにつれて、障害児教育に関する人々の関心が高まってきた。しかし、当時中国の障害児教育は先進国に比べて、特に遅れている状態であった。1987年の調査によると、当時中国の学齢期の障害児は600万人以上であったが、入学率はわずか6%しかなかったことが報告されている。これらの障害児の多数が経済的に遅れている交通が不便である農村地域に居住していたが、数少ない特殊教育学校はほとんど大都市に設置されていた。このため、多数の農村地域の障害児には教育の場がなかった。障害児の義務教育の実現には、単一的な障害児教育形態¹⁾を改革して、新しい障害児教育形

態を作らなければならなかった。「随班就読」はこのような当時の現実的な問題である多数の農村地域の障害児の就学問題を実現するために生まれた中国独自の制度である。「随班就読」とは、「障害のある生徒を通常学校のクラスの中に入れて、教育を受けさせる障害児教育の形態のひとつである」²⁾。「随班就読」は欧米のインテグレーションとは出発点、実施目的、実施方法上区別がある³⁾。中国の「随班就読」は障害児教育が先進国に比べて非常に遅れていた1980年代に実施された教育形態であり、インテグレーションは障害児教育がかなり進んでいた段階で障害児の教育権利を保障するために実施された教育理念である。「随班就読」という言葉は、1988年に中国政府が公布した「中国障害者事業5年工作綱要」ではじめて現れたものである。「随班就読」の対象児は主に視覚「盲と低視力」、

聴覚「聾と重度の聴覚」、知的障害児「軽度あるいは中度」という3種類である⁴⁾。「随班就読」生徒は、自宅の近くにある学校へ入学して「随班就読」を受けている。入学年齢は、他の児童と同様であり、学校から身体・生理面と心理面の両方へのサポートを受けることになっている。「随班就読」は、主に三つの形態で行われている。すなわち、「全日『随班就読』」、「半日『随班就読』」と「全日『随班就読』付設『補導室』」という形態がある。

中国政府は1989年に河北、黒竜江、江蘇、山西、北京などの地域で、視覚、知的障害児を対象とした「随班就読」の現地研究、1992年には聴覚障害児の現地研究、1994年には中国で経済的に一番遅れている西南、西北の貧困地域における三種類の障害児の現地研究を行った。

現地研究の内容は「随班就読」の対象、「随班就読」の教員の資質、カリキュラム問題であった。現地研究の目的は農村地域における「随班就読」の実施可能性を探索することであった。現地研究に際して、中国政府は陳⁵⁾に委託して、1991年に「随班就読」教師に関する研修を行った。1994年、国家教育委員会は、江蘇省で「全国障害児『随班就読』工作会議」を開き、これまでの「随班就読」の実績をまとめると同時に、新たな目標と方針を打ち出した。当年、国家教育委員会は「随班就読」の具体的な方策である「障害児の『随班就読』の展開に関する試行法案」を打ち出した。これから、「随班就読」は障害児教育の主な教育形態として、本格的に中国の全土で実施されるようになった。

学齢期の「随班就読」の実施によって、もともと教育を受けられなかった多数の農村地域の障害児が教育を受けられるようになった。2008年まで中国では在籍障害児の約63.27%が通常教育現場で教育を受けられるようになった⁶⁾。「随班就読」の対象児も視覚、知的、聴覚障害児からLD、ADHDなど多種類の障害児へ広がっていた。

このように、中国における学齢期の障害児の教育問題はある程度解決されたが、就学前の障害児の保育、教育問題は未だに解決されないまま、地域の多数の障害児が普通教育機関の対象以外におかれている。就学前「随班就読」は行政的にも、法的にも認められて、一部の大都市では実施されているが、地域ではほとんど実施されていない。そこには中国独自の教育制度が抱えている困難性と課題があるように思われる。つまり、教育形態としての就学前「随班就読」の実情と課題を検討することは、中国の障害児教育の今後の進展に極めて重要であると考えられる。

就学前「随班就読」に関する先行研究を見ると、日本では荻原⁷⁾、中国では、楊⁸⁾、譚⁹⁾、王¹⁰⁾、徐¹¹⁾、焦

ら¹²⁾などがあげられる。荻原の報告書では、中国四川省の部分的県の小学校、幼稚園における障害児教育と「随班就読」の取り組みを考察することによって、四川省の障害児教育と「随班就読」の現状について分析した。この研究は日本ではじめて幼稚園における「随班就読」の現状について分析したものである。しかし、この研究は、三つの幼稚園における「随班就読」の取り組みについて簡単に分析したものにすぎない。中国でも「随班就読」に関するさまざまな理論研究および実態調査などが行われている。中央教育科学研究所の楊の研究では、就学前「随班就読」の有効性について、障害児、健常児、幼稚園教師、保護者および経費など五つの側面から詳細に分析した。その他、現在不利な状況に処せられている障害児の早期教育についてインクルージョンの視点から分析を行った譚の研究、中国の大都市の就学前特殊教育現状について分析した王の研究、「随班就読」幼児の個別指導について報告した徐の研究がある。そのほか、調査研究としては、張¹³⁾、孫¹⁴⁾、焦¹⁵⁾らの研究がある。

張の研究では、北京市12校の就学前特殊教育機関の基本状況を分析することによって、現在北京市就学前特殊教育の課題について検討した。孫の研究では、就学前「随班就読」に関する5校の幼稚園教師、保育士に対するアンケート調査を分析することによって、就学前「随班就読」の課題について指摘した。焦の研究では、中国河北省の320校の幼稚園の少数の幼稚園教師に関するアンケート、聞き取り調査に基づいて、幼稚園教師の意識について分析した。これらの研究ははじめて就学前「随班就読」について分析を行った研究であり、はじめて就学前「随班就読」の実施者である幼稚園教師の意識について分析を行った研究である。しかし、これらの研究で扱った調査項目は簡単なもので、就学前「随班就読」については十分明らかにされていない。

そこで、本稿では、閩門市における就学前「随班就読」に関する「随班就読の経験有り幼稚園教師」（以下「経験有り教師」と略）と就学前「随班就読の経験なし幼稚園教師」（以下「経験なし教師」と略）を比較しながら、中国の農村地域における就学前「随班就読」の実情と課題を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 中国吉林省閩門市における就学前「随班就読」の実態

1. 吉林省閩門市について

閩門市は中国の少数民族地域である延辺朝鮮族自治州の小都市として、北朝鮮と境を接している。延辺朝

鮮族自治州の人口は220万人として、59%の漢民族、38.1%の朝鮮族、2.9%のほかの少数民族が居住している。この地域は経済面では中国で遅れている地域であるが、国民が教育を受けているレベルは全国の平均値の2倍になっている。この自治州に属している図門市の総面積は1,142平方キロメートル、人口は13.6万人、その中で市の障害者は283人、障害者の4.07%を占めている。2007年現在、市には公立幼稚園7校、私立幼稚園13校がある。その中で、障害幼児を受け入れたことがある幼稚園としては、公立幼稚園である市朝鮮族幼稚園、石硯幼稚園、私立幼稚園である貴鳳幼稚園、英才幼稚園である。

2. 研究方法

筆者は2007年8月に中国吉林省図門市の5校の公立幼稚園、2校の私立幼稚園について実態調査を行った。調査方法としては、図門市公立幼稚園5校、私立幼稚園2校の200人の幼稚園教師に対してアンケート調査、保育観察および部分的幼稚園園長、幼稚園教師に対するインタビュー調査を行った。本稿では、この中の幼稚園教師に関するアンケート調査について主に分析する。

3. 調査について

アンケート調査の内容としては、「幼稚園教師の一般状況」と「随班就読に関する意識」という2項目から構成されている。「幼稚園教師の一般状況」には10項目、「随班就読に関する意識」には23項目、合計33項目である。アンケート調査用紙は2007年8月9日午前中に配布し、その日の午後回収した。アンケート調査の有効サンプル数は178人、回収率89%であった。

本稿では、178人の幼稚園教師を「経験有り教師」と「経験なし教師」という二つに分けて、t検定を行った結果について分析する。

4. 就学前「随班就読」に関する図門市幼稚園教師の意識調査結果について

表1 就学前随班就読の「経験有り」幼稚園教師と「経験なし」幼稚園教師の意識比較表：(t検定)

項目	経験あり教師	経験なし教師	有意差 t検定
1 障害幼児が私のクラスに入っていることはいいことではない。	2.53	1.75	t = 0.001 P < 0.05
4 障害幼児ももっとも制限の少ない環境の中よい人間関係を作れる。	2.93	3.44	t = 0.03 P < 0.05
8 随班就読は現在わが国における障害児の就学率を高める有効な教育方法である。	3	2.58	t = 0.097 P < 0.1
23 障害幼児の教育は誰にも認められないやりがいのない事業である。	1.8	1.52	t = 0.07 P < 0.1

5. 分析

調査結果について、「まったく当てはまらない」(1点)、「あまり当てはまらない」(2点)、「やや当てはまる」(3点)、「よく当てはまる」(4点)に4段階評価として集計し、その平均点回答のt検定にて分析した。

結果、項目1、4に対する「経験有り」幼稚園教師と「経験なし」幼稚園教師の間には有意な差、項目8、23に対する「経験有り」幼稚園教師と「経験なし」幼稚園教師の間には有意な傾向があった。

「障害幼児の入園について反対の意識を持っている」という項目について、t検定の結果、両者の平均の差は有意であった。したがって、「経験有り」幼稚園教師が「経験なし」幼稚園教師よりも就学前「随班就読」について否定的な意識が強いことが示された。この結果は先行研究の調査結果とは異なる部分である。北京師範大学の章と香港師範大学の袁が2000年に通常学校教師と特殊教育学校教師に対して行ったアンケート調査¹⁶⁾では、通常学校教師の意識が特殊教育学校教師に比べて、消極的であると報告されている。これは障害児のニーズに対する把握が不足で、特殊教育に関する理解が不足であれば「随班就読」に関する意識が消極的であると分析されている。

張¹⁷⁾の2004年の大連市における通常小学校教師に対するアンケート調査でも、「随班就読」の「経験なし」教師のほうが「経験有り」教師より「教育の場の分離意識」が強いことが示された。また、「随班就読の不利な影響」についても、「経験なし教師」のほうが「経験有り教師」より「随班就読」の不利な影響について賛成の意識を持っていた。先行研究と違う結果が出たのは、筆者の調査は地域の幼稚園教師における調査のため、違う結果が出たと考える。地域の幼稚園環境を見ると、小学校に比べて、就学前「随班就読」を実施する際の「環境」が整っていないと考える。障害幼児を受け入れたことがある「経験有り」幼稚園教師にとって、現段階では地域における就学前「随班就読」の実施が困難であると考えているだろう。

「障害幼児の人間関係」の第4項目について、t検定の結果、両者の間には有意な差が見られた。したがって、「経験あり教師」が「経験なし教師」より通常教育場の障害幼児の人間関係について、否定的な意識を持っていることが示された。中国では、今でも障害児に対する人々の否定的な意識が強い。今回インタビューなどで強く感じたのは、地域の幼稚園園長、幼稚園教師、保護者の障害児に対する否定的な意識であった。このような否定的な意識が幼稚園ほかの健常児の保育にも影響があるだろう。このような「不利な環境」の障害

幼児を「経験したこと」がある「経験有り」幼稚園教師にとって、もちろん「障害幼児の人間関係」について、否定的意識を持っているものと考えられる。

「随班就読」は現在、中国の障害児の有効な教育形態であるとの項目について、t検定の結果、「経験有り」幼稚園教師のほうが「経験なし」幼稚園教師に比べて賛成の意識が強かった。

最後に有意な傾向が見られたのは「特殊教育に携わることはやりがいがない」という項目であった。「経験有り」幼稚園教師のほうが「経験なし」幼稚園教師に比べて消極的であった。このことは、就学前の「随班就読」の実施中、幼稚園教師の負担よりも、ほかの要因が生じていることを意味している。

6. 考察

全体的に見ると、「経験有り」幼稚園教師は就学前「随班就読」の実施に消極的であった。就学前「随班就読」の実施中、「経験有り」幼稚園教師が考えたのは幼稚園に在籍している障害幼児の人間関係の問題であり、これは障害幼児と健常児との関係性が上手くいかない場合があることを示している。王¹⁸⁾の上海市就学前「随班就読」に関する報告書には就学前「随班就読幼児」に対する健常児の差別態度について指摘されている。このような環境は確かに障害幼児の健全な成長にマイナス影響を与えてくれる。中国特殊雑誌の中でも幾つかのこのような不利な環境の中で通常教育場を離れている「随班就読生」の記事が記載されている。今回調査の中、「経験有り」幼稚園教師も就学前「随班就読」の実施中、通常保育現場の障害幼児のこのような不利な影響を感じただろう。

また、「経験有り」幼稚園教師の意識の中には就学前「随班就読」に関する積極的側面があることが明らかになった。

「経験有り」幼稚園教師は就学前「随班就読」の実施にやりがいを感じていないながらも、「随班就読」が現在中国における障害児の入学率を高める有効な教育形態であると感じている。このことは、「経験有り」幼稚園教師の意識の中には、今後就学前「随班就読」の実施に必要なさまざまな要素が整っている環境の中では、「随班就読」の実施に賛成するという意識が含まれていることを示している。

そのほか、「経験なし」幼稚園教師の意識の中には就学前「随班就読」に関する積極的側面がある。

約81%の多数の幼稚園教師は障害幼児が自分のクラスに入ることに賛成意識を持っている。約88%の教師は、障害幼児が通常保育現場でいい人間関係を作ることができる信じている。また81%の教師が就学前「随班就読」は意義がある事業であると意識して

いる。これは、幼稚園教師の意識は全体的に見ると、積極的側面が多いことを示している。就学前「随班就読」が今後地域で普及可能であるのかは、教育現場の実施者である幼稚園教師の意識と密接的な関係がある。地域幼稚園教師のこのような意識は、今後就学前「随班就読」を地域で普及される際の貴重なものであり、このことは就学前「随班就読」事業が地域でも普及される可能性があることを意味している。

おわりに

以上、吉林省図門市における就学前「随班就読」に関する幼稚園教師の意識について分析した。この分析を通じて、以下の課題があげられる。

1. 幼稚園教師の研修の内容、師範学校に設置されている特殊教育学科の内容と「随班就読」現場で求められる幼稚園教師の特殊専門知識とは大きな「ズレ」が生じている。
2. 就学前「随班就読」に関する人々の「積極的」意識には不安定面がある。このような「不安定要素」をどのように「安定要素」に転回させるのは長時間の人々の努力によって実現しなければならない。

【謝辞】

本研究を遂行するにあたり、数多くの方々のご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

主任指導教官である七木田敦先生には、研究の具体的な進め方と日本語の表現などについて、暖かいご指導いただきました。深くお礼申し上げます。

ならびに、幼年教育研究室の先輩方からも、有益なご助言やご討論いただきました。そして、今回の中国図門市での調査に協力していただきました幼稚園園長、幼稚園先生の方々に厚くお礼を申し上げます。

【注】

- 1) 「随班就読」実施前には、特殊教育学校というひとつの障害児教育形態しかないことを指す。
- 2) 陳云英「全納教育的元型」「中国特殊教育」2003年 第2期 1-9頁。
- 3) 朴永馨「特殊教育概論」1995年 北京華夏出版社。
- 4) 国家教育委員会「関(於)開展殘疾兒童少年隨班就讀工作的試行方法」1994年7月21日。
- 5) 台湾人として、1980年代にアメリカに留学して博士学位を修得後、中国の中央教育科学研究所に特殊教育研究室を設置した。これから、中国では陳の指

- 導の下、「随班就読」に関するさまざまな実地研究が行われた。
- 6) 教育部「2008年全国教育事業発展統計」<http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/info20464.htm>.
 - 7) 萩原はるみ「中国における障害児教育に関する一考察(2) — 四川省の障害児教育と随班就読の現状 — 一名古屋柳城短期大学研究紀要 2006年 第28号 137-150頁.
 - 8) 楊希潔「關於学前全納教育有効性的思考」[中国特殊教育] 2005年 第9期 3-7頁.
 - 9) 譚友坤「論幼兒弱勢群體的早期教育政策支持」[中国特殊教育] 2005年 第12期 3-6頁.
 - 10) 王熙珍「有特殊教育需要幼兒随班就読研究報告」[中国特殊教育] 2002年 第3期.
 - 11) 徐勝「特殊幼兒融合教育個案研究報告」[中国特殊教育] 2005年 第7期 59-64頁.
 - 12) 焦云紅・唐鍵・赫紅英・吳立新・安力戈「河北省城市普通幼稚園学前特殊教育調查与分析」[中国特殊教育] 2004年 第2期 91-93頁.
 - 13) 張燕「北京市学前特殊教育的調查与思考」[中国特殊教育] 2003年 第3期 57-62頁.
 - 14) 孫玉梅「幼教工作者对特殊幼兒融合教育問題的態度和意見的調查研究」[中国特殊教育] 2007年第12期 8-13頁.
 - 15) 12) と同上.
 - 16) 韋小滿・袁文得「關於普小教師与特教教師对有特殊教育需要學生随班就読態度的調查」[中国特殊教育] 2000年 第3期 31-33頁.
 - 17) 張秀娟(未刊行)「中国における『随班就読』に対する教育的支援の実態と教員の意識に関する研究 — 大連市における通常小学校, 特殊学校の事例として —」, 平成16年度広島大学教育学部卒業論文.
 - 18) 王熙珍「有特殊教育需要幼兒随班就読研究報告」[中国特殊教育] 2002年 第3期.

(主任指導教員 七木田 敦)